

PROGRAM

ボッケリーニ(ベリオ編曲): マドリードの夜の帰営ラッパ (約7分)

Luigi Boccherini (arr. Luciano Berio): Ritirata notturna di Madrid

ブリテン: ヴァイオリン協奏曲 二短調 op.15 (約34分) ★

Benjamin Britten: Violin Concerto in D minor, op.15

第1楽章 モデラート・コン・モート Moderato con moto

第2楽章 ヴィヴァーチェ Vivace

第3楽章 パッサカリア: アンダンテ・レント Passacaglia: Andante lento

— 休憩 (20分) — Intermission

<J.S.バッハ編曲集 ~交響曲風に構成~>

Johann Sebastian Bach

エルガー編曲: 幻想曲とフーガ op.86 (約9分)

arr. Edward Elgar: Fantasia and Fugue op.86 (arr. of BWV 537)

レーガー編曲: おお人よ、汝の大なる罪を嘆け (約5分)

arr. Max Reger: O Mensch, beweine dein' Sünde groß (arr. of BWV 622)

ホルスト編曲: ジーグ風フーガ (約3分)

arr. Gustav Holst: Fugue à la gigue (arr. of BWV 577)

齋藤秀雄編曲: シャコンヌ (約16分)

arr. Hideo Saito: Chaconne (arr. of Violin Partita No. 2, BWV 1004: V)

指揮: 下野 竜也 Tatsuya Shimono, Conductor


ヴァイオリン: コリヤ・ブラッハー Kolja Blacher, Violin (★演奏曲)

管弦楽: 兵庫芸術文化センター管弦楽団 Hyogo Performing Arts Center Orchestra

2016 5/13(金)・14(土)・15(日) 3:00PM開演
兵庫県立芸術文化センター KOBELCO 大ホール

主催: 兵庫県、兵庫県立芸術文化センター

※演奏時間は目安となります。前後する可能性がありますので予めご了承ください。

助成:  文化庁文化芸術振興費補助金
(舞台芸術創造活動活性化事業)これさえ
見れば
わかる!

今回の聴きどころ

東条 碩夫(音楽評論家)

華麗で多彩な音色が満載のプログラム

今日のプログラムで特に目立つのは、20世紀風に編曲された18世紀の名作が集められていることである。指揮者・下野竜也は、こういうユニークなプログラムをしばしば聴かせていることでも有名な人だ。聴き応えのある演奏になるはずである。

前半では、18世紀後半に活躍したイタリアの作曲家ボッケリーニの作品を、20世紀の作曲家ベリオが編曲したものが演奏される。豪壮華麗な編曲が聴きものだ。

また後半では、18世紀前半に活躍した音楽史上の巨人バッハの作品4曲を、英・独・日の近代音楽家がさまざまなスタイルで編曲したものが並ぶ。原曲を知る聴き手にとっては興味が尽きないが、原曲を知らなくても一向に構わない。壮大で深みのあるバッハの音楽が、分厚い響きの管弦楽版で蘇るのを楽しもう。

その間には、英国の作曲家ブリテンの「ヴァイオリン協奏曲」が演奏される。一般的には馴染みのない曲だが、これは素晴らしく美しい。

ライター
おすすめ「必聴ポイント」**ボッケリーニ(ベリオ編曲): マドリードの夜の帰営ラッパ**

行進曲の主題は、一度聴いたら忘れられないフシ。

大編成のオーケストラが響かせる夜警隊の行進の光景。隊列が眼前を通り過ぎて行くクライマックス個所での大音響は物凄い。ベリオの管弦楽法は複雑でダイナミックである。

ブリテン: ヴァイオリン協奏曲 二短調 op.15

ブリテンはこんなに多彩で綺麗な曲を書く人だった

若きブリテンが深い感情をこめて書いた佳曲。演奏される機会はそう多くないが、初めて聴く方もその華麗さと叙情的な美しさに魅了されるはず。ブラッハーのソロも聴きもの。

J.S.バッハの作品からの編曲集 ~交響曲風に構成~

バッハの音楽は大管弦楽用に編曲されても素晴らしい

4人の管弦楽編曲で並んだバッハの作品集。遅いテンポの曲を「第2楽章」に、軽いスケルツォ風の曲を「第3楽章」に、前後を堂々たる風格の曲で固めた交響曲風の形式で配列。

PROGRAM NOTE

曲目解説 — 演奏をより深く楽しむために 東条 碩夫(音楽評論家)

ボッケリーニ(ベリオ編曲): マドリードの夜の帰営ラッパ

初演: 原曲 不詳 編曲版 1875年 ミラノ

超大規模で豪壮なベリオの編曲

大作曲家ハイドンとほぼ同時代に生きたイタリアの作曲家ルイージ・ボッケリーニ。その名にはおなじみがない人でも、いわゆる「ボッケリーニのメヌエット」(「弦楽五重奏曲ホ長調 op.11-5 G275」の第3楽章に当る軽快優雅な曲)なら、どこかで聞いたことがあるはずである。

ところで、彼には他の自作の室内楽曲から編曲した12曲の「ギター五重奏曲」があり、これらは、彼を援助した貴族で、アマチュア・ギタリストでもあったペナベンテ侯爵に献呈されたと伝えられる。そのうち、最も有名なのが、「第9番ハ長調 G453《マドリードの夜の帰営ラッパ》」(1799年頃)である。これは3楽章からなる「ピアノ五重奏曲ハ長調 op.56-3 G409」(1797年頃)のあとに「弦楽五重奏曲ハ長調 op.30-6 G324《マドリードの通りの夜の音楽》」(ほぼ同時期)の終楽章を第4楽章として取り入れ、全体をギターと弦楽のための五重奏に編曲したものであった。

この第4楽章は、遠くから夜警隊が近づいて来て、力強い行進でクライマックスを築いたのち、また遠ざかって行く——という光景を描いたリズムカルなもので、ボッケリーニのウィットが発揮されたと評される音楽だが、今日ここで聴くのは、その第4楽章を、イタリアの現代作曲家ルチアーノ・ベリオがミラノ・スカラ座管弦楽団の委嘱を受けて編曲したものだ。ただし、この原曲には多少の異版があり、ベリオはそれらを組み合わせて編曲したとされている(注1)。

ベリオ(1925~2003)は、20世紀最大の作曲家のひとりで、1955年にはイタリアのミラノに電子音楽スタジオを創設、またフランスの音楽組織IRCAMでも電子音響部門の責任者を務めたこともある。編曲ものも多数あり、マーラーの「第2交響曲《復活》」第3楽章をもとにした「シンフォニア」、プッチーニの「トゥーランドット」の最終場面などが有名だ。シューベルトの「第10交響曲」のスケッチを基にした「レンダリング」などでは、シューベルト

の軽やかな音楽が進んで行く中に、ベリオによる不気味な楽想が突然メラメラと妖怪のように混入するといった具合である。——この「マドリードの夜の帰営ラッパ」でも、打楽器を加えた大編成の管弦楽による豪快なアレンジが面白い。

楽器編成

フルート3(ピッコロ持替)、オーボエ2、イングリッシュ・ホルン、クラリネット2、バス・クラリネット、バスーン2、コントラ・バスーン、ホルン4、トランペット4、トロンボーン2、バス・トロンボーン、チューバ、ティンパニ、大太鼓、スネアドラム2、トライアングル、ハープ、弦楽5部

Profile

ルイージ・ボッケリーニ (1743~1805)

「柔和で、忍耐強く、礼儀正しい性格」だったボッケリーニは、イタリアのルッカに生まれ、チェロの名手として知られ、ウィーンやパリでも活動し、1769年以降はスペインのマドリードに本拠を置き、宮廷のドン・ルイス王子の庇護を1785年まで受けた。のち、プロイセンのヴィルヘルム2世の宮廷作曲家を務めたこともある。室内楽、特に弦楽五重奏曲に多くの作品を残した。マドリードで没したが、晩年は貧しい境遇にあったといわれる。



ブリテン: ヴァイオリン協奏曲 二短調 op.15

初演: 1940年3月28日 ニューヨーク

めったに聴けないが、聴いて良かったと思える曲

英国の作曲家ベンジャミン・ブリテンも、20世紀の作曲家の中では、最も広く親しまれている1人である。前項のベリオとはまったく異なり、前衛的な作風でなく、トラディショナルな手法に基づいた作品を残した作曲家だ。最も有名なのは「青少年のための管弦楽入門」(1946年)であろう。また「シンプル・シンフォニー」(1934~36年)も有名であり、オペラ「ピーター・グライムズ」(1945年初演)も彼の名を一躍世界的に高めた名作であった。日本が皇紀2600年(昭和15年/1940年)記念祝賀行事の一環として世界の一流作曲家に作品を委嘱した際には「シンフォニア・ダ・レクイエム」を書いて応えたことがある(だが題名

J.S.バッハの作品からの編曲集

～交響曲風に構成

下野竜也ならではの巧みな選曲と配列

エルガー編曲：幻想曲とフーガ op.86

初演：原曲 不詳 編曲版 1922年9月2日 ロンドン

ヨハン・セバスティアン・バッハほど、その作品群が多く音楽家の手により編曲され、親しまれている作曲家は、他に例を見ない。彼の作品が多様な解釈に耐えうるという、稀有な価値を備えている証拠であろう。この曲は、原曲はオルガン曲「幻想曲とフーガ BWV537」(注2)で、作曲年代には諸説あるが、彼がケーテンの宮廷楽長を辞してライブツィヒのトマス・カントル(市の音楽総監督)に就任した1723年(38歳)以降に書かれたものとする説が一般的だ。

英国の音楽史上屈指の大作曲家エドワード・エルガー(1857~1934)は、1921年に「フーガ」の部分、翌年「幻想曲」の部分、何と自分の作品番号をつけ、秋に自ら指揮して全曲を初演した。原曲の4分の6拍子を4分の3拍子に変え、打楽器やハーブを含めた大編成の管弦楽作品に仕上げた編曲は、原曲よりも大きな起伏を備え、絢爛壮大な色彩的効果を発揮する。

楽器編成

フルート2、ピッコロ、オーボエ2、イングリッシュ・ホルン、クラリネット2、バス・クラリネット、バスーン2、コントラ・バスーン、ホルン4、トランペット3、トロンボーン2、バス・トロンボーン、チューバ、ティンパニ、大太鼓、シンバル、スネアドラム、トライアングル、タンブリン、グロッケンシュピール、ハーブ2、弦楽5部

が祝祭には不穏当だという理由で、日本側は作品を受け取ったものの演奏はしなかった。

さて、ブリテンは1939年、故国を離れて北アメリカに移ったが、それは彼が反軍国主義者で、兵役を拒否していたことや、彼が映画の仕事を通じて意気投合していた詩人オーデンが北米に移住していたことなどに関連がある(英国には1942年に戻ったが、兵役は結局免除された)。この「ヴァイオリン協奏曲」は、その北米で1939年に書かれたものである。26歳という若い時期のものだが、すでに成熟した情感が聴き取れ、美しさも際立っている作品だ。

3つの楽章は切れ目なく演奏される。第1楽章は、ベートーヴェンの「ヴァイオリン協奏曲」や、リヒャルト・シュトラウスの「ブルレスケ」と同じようにティンパニのリズムで開始される。また全曲の大詰箇所は非常に印象的で、不安を滲ませつつ祈るような二長調の和音が響く上に、ヴァイオリンのソロが打ち震えるように語り続けるあたり、異様な雰囲気醸し出す。

なお、この第3楽章は「パッサカリア」という副題がついている。「パッサカリア」とは、もともとは3拍子の舞曲を指すが、音楽形式の上では、特定の低音の旋律の上に変奏が繰り返され、短調で作られ、重々しい楽想になることが多い。この曲でも悲劇的な雰囲気を生み、特に楽章の中ほどでは嵐のように激しい頂点をつくるが、やがて静かな哀しみの情感に移って行く。なおブリテンはこの曲に、1958年にも大幅な改訂を施している。

楽器編成

独奏ヴァイオリン、フルート3(ピッコロ持替2)、オーボエ2(イングリッシュ・ホルン持替)、クラリネット2、バスーン2、ホルン4、トランペット3、トロンボーン2、バス・トロンボーン、チューバ、ティンパニ、大太鼓、シンバル、スネアドラム、テナードラム、グロッケン、タンバリン、ハーブ、弦楽5部

Profile

ベンジャミン・ブリテン (1913~1976)

ローストフトに生まれ、オールドバラで世を去った英国の大作曲家のひとり。曲目解説の項にあげた作品の他に、ロストロポーヴィチに献呈した「無伴奏チェロ組曲」や「チェロと管弦楽のための交響曲」なども有名だが、「夏の夜の夢」(7月に当劇場で上演予定)や「ルクレシアの凌辱」「ヴェニスに死す」「カーリュウ・リヴァー」(「隅田川」を翻案したもの)、「戦争レクイエム」など、得意のオペラと声楽の分野にも数多く傑作を残している。



レーガー編曲: おお人よ、汝の大いなる罪を嘆け

初演: 不詳

ケーテン宮廷楽長になるより更に前(1708~17年、23~32歳)、バッハはワイマールの宮廷でオルガニストや楽団長を務めていたことがあったが、その時期に作曲された名作に「オルガン小曲集 BWV599~644」がある。すべて教会の行事のために書いた小品で、それに含まれる1曲がこの美しい「おお人よ、汝の大いなる罪を嘆け BWV622」である。

編曲は、ドイツのライプツィヒに生れたマックス・レーガー(1873~1916)。渋い作風で多くの作品を残した人だが、先人の名作の編曲も非常に多く手がけており、そのひとつが1915年に編曲したこの曲である。原曲の静かな祈りの楽想が、弦楽器群の極めて柔らかい音色で再現されている。

楽器編成

弦楽5部

ホルスト編曲: ジーグ風フーガ

初演: 原曲 不詳 編曲版 1930年

原曲はオルガン曲の「ト長調 BWV577」だが、これは偽作(バッハ本人の作ではない)とみられている。しかし飛び跳ねるような楽想は、いかにもgiguer(跳ぶ)という言葉に関連のある舞曲「ジーグ」にふさわしい。

編曲したのは、組曲「惑星」が人気作品となっている英国の作曲家グスタヴ・ホルスト(1874~1934)。最初は1928年に英国BBC放送のためのミリタリー・バンド用に編曲し(ジョン・ミッチェル校訂による大編成の吹奏楽版が親しまれている)、次いで1930年、弦楽器を加えて2管編成の演奏会用作品としたこの版を新たにつくり、みずから指揮して初演したのだった。

楽器編成

フルート2、オーボエ2、クラリネット2、バスーン2、ホルン2、トランペット2、トロンボーン2、チューバ、弦楽5部

齋藤秀雄編曲: シャコンヌ

初演: 原曲 不詳

ケーテンの宮廷楽長時代(1717~23年、32~38歳)に、バッハは器楽曲を中心に多くの名作を生み出した。そのひとつが1720年に作曲された「無伴奏ヴァイオリンのためのソナタとパルティータ」全6曲で、「シャコンヌ」は、そのうちの「パルティータ」第2番の終楽章にあたる曲だ。「シャコンヌ」とは「パッサカリア」同様、もともとは特定の低音の旋律の上に変奏が繰り返されて行く形式の舞曲をさす。壮大な風格と厳しい造形で人気があり、何人かによる管弦楽編曲版がある。

今回聴くのは齋藤秀雄(1902~74)による堂々たる優れた編曲版である。齋藤秀雄は、「サイトウ・キネン・オーケストラ」などにその名を残す人で、音楽学校の桐朋学園の教授として、小澤征爾を筆頭に数多くの名演奏家を世に送り出した指揮者・教育者であった。これは、彼が1960年代に、学生たちのオーケストラ練習用のために編曲したものといわれている。

楽器編成

フルート2、ピッコロ、オーボエ2、クラリネット2、バスーン2、ホルン4、トランペット2、トロンボーン2、バス・トロンボーン、チューバ、ティンパニ、弦楽5部

(注1)シャイア指揮のCD(デッカ)には「《マドリードの夜の帰宮ラッパ》の4つの版」という表示がある
(注2)「BWV」はバッハの作品番号。

Profile

ヨハン・セバスティアン・バッハ (1685~1770)

アイゼナハに生まれ、ライプツィヒで世を去った、ヨーロッパ音楽史上、最も偉大な作曲家のひとりである。室内楽や独奏曲、宗教曲等を中心に、数限りない傑作を残した。生涯の大半を宗教関連の音楽活動に向けていたが、彼の音楽に息づくものは、更に全人的な精神である。不思議にも生前は周辺からあまり高く評価されず、またその死後もしばらく忘れられた存在だったが、19世紀半ば頃からその音楽の超越した価値が認められて行った。

